坤儀革正録

四

和書門 類
三一六八二 號
一二六 函
二 架
五六 冊

内閣文庫
和書 類
三一六八二 號
五六 冊
一五〇 函
二三 架

内閣文庫
番號 和 31682
冊數 56(4)
函號 150 153

史 八五ノ六

国立公文書館
National Archives of Japan

嘉永六癸丑年 第四

一 阿蘭陀船持渡之風説書

一 魯西亜船渡來長崎奉行届

一 細川家藩中布達

一 和蘭陀江船艦銃器注文

一 夷人渡來ニ付一社一同江御祈御達

一 米利堅船渡來應接始末

一 俄羅斯書翰和解并應接

閣5-4

国立公文書館
National Archives of Japan

一 當年入津仕候阿蘭陀船持渡候別段風説書一冊和解いたし差上候様和解方仕候者共へ申付横文字和解共差上申候

丑七月　大沢豊後守

一 嘉永六丑年七月御書付を以御尋御座候ニ付承知仕候差渡之年より申渡

別段風説書

一 嘉永五子年ニスウェーデン国并ノールトウェーケン国王の太子ニ嫁娶和蘭国の女ナツ○ヲ以ストックホルム所名ニ於テ一男子出産申候是をカールオスカルラテルヘルムフテリッキと称申候

一 和蘭国中只今ニ鉄道沿道国ハ勿論于北欧羅巴洲並極遠交易商業渡世之者繁昌候儀ニ而御座候

筆者云此末数件外洋之事而已故畧ス

一 当四月十七日唐国香港之便の風説ニてハ唐国南京ニおゐてアメリカ海軍の内此月始日本へ差向居候者ハ外マカセインシキツフ府庫軍船サツフレイ号船ハ当時マカオニ有之候アトフイースツアールトイク地理見用船ロフリセ号船当此月始ホンコンゟ返帆致候サラトカ号船ハ右マカオゟ出帆致候風聞ニ御座候ハ右海軍日本へ差向船ハ此節琉球へ相集ハ申間敷候

一 当時評判記ニエケレス軍船唐国海ニ備有之候義相記し有之候ハ右等戦争之事ニ候哉巨細ニ記載無之候

一 当三月十五日唐国香港役々風説ニアリカール号船ヘルメイス日上リ日ミンテン日ハピツト日ハツテルン日サラマントル日スバルタン日唯是ホの船有之候而是ヲ東印度海諸所ニ有之候ヒユルマ地名ニおゐて戦争ニ付フランクス号船ハスシンク上日スフエント上日ライサンセトル上日当時ヒユルマ湊船ハヒツテルン号船ヲ差添候咬𠺕吧湊へ着船致候由ニ候

此末路件中畧致候事ヲ記載不致

一 此年風説ニ北アメリカ共和政治館自本国ゟ申越し候度思召有之候ハ処此年八月十六日ヨヨルク地名のデヘテルト日記の名中ニ右一件委しく記載有之候ハ

一 日本へ差向候一件の発起ハ右募り候ワスシンクトン地名より通達有之候ハ右使節ニ申付船ミスシスシツヒ号船司

ロング（人名）ニ有之、但此年九月初るより廿日迄之内子ウヨルクより
出帆可致、プリンセトン（船号）船司ペルレイ（人名）并ミスシスシツヒ（船号）に
差添御付バルチモーレ（地名）ニ而船繕ニチートルの蒸気船の用具を取揃
へアルングハン子イ（船号）并カスボルト（地名）ニ而修補を加へ、此年十一
月此地を出帆の積ニ而、大船并出帆候筈、此事殊之外急速
ニ用立候様ニ仕候趣ニ而、司并ヘルレイ（人名）ニ有之、此年九月下向
日本ニ而談判ニ可差越為、日本ニ而異見有之候、彼地ニ而年々出会
ニ合ニ有之候、右差向ニ而多分蒸気船の談判ニ而有之候、例年の
為差向者とも八当付属国ニ而談判ハ、但其ハ船司ヒヒエルト
（人名）の指揮ニ有之、右ニテルサン（人名）当時子ウセルク（地名）ニ有之候

談判之有之候処、此年十月中旬の風說ニハ、右諸船ハ日本ニ向ケ
出帆いたし候由ニ有之候

一 フヱルモント　大サ 三千トン　大砲九十六挺　乗組 八百人
一 （蒸気船）ミスシスシツヒ　同 千七百トン　十挺　同 三百七十五人
一 （同）シユスクハンナ　同 二千二百トン　九挺　三百五十人
一 ホウハタン　同 同　二挺　二百七十人
一 サラトカ（船号）　二十二挺　百九十人
一 アロカ子イ　千トン　二挺　同
一 フインセンユース　二十二挺　同
一 ホーホイセ　十挺　百二十人

一 ファロール　四挺
一 ラーセー　二十二挺　四百五十人
一 リウタンブトン　四挺
一 レントマレイス　二十二挺　百七十人
右之内大軍船八艘ニ而外小軍船ニ而大砲凡計二百三十六挺ニ
乗組人数凡計三千百二十七人と申候
一 ロシヤ国海軍日本海ニ罷在候由ニ申候船はフレカット軍船の称
ハルラス号船一艘メランスホルトンシキップの船運送船一艘蒸気船一艘ニ
てフイーセアトミラール官名フラニーケン人名の指揮と申候右之外ア
メリカ海軍の様子も承候処不相替様子ニ申候

一 船ニ乗組候ミリホンニヤ不ニ有之和蘭陀医師イカフファンデンブルッ
ク人名儀今度役儀ニ付出島在館ニ相決申候
右之通ニ御座候　かひたん名き申立候（本ノマヽ）
右之通和解差上申候以上
丑七月
西 吉兵衛 印
森山 栄之助 印
西 慶太郎 印
本木 昌造 印
楢林 栄七郎 印

嘉永六丑年七月十日異国船渡来ニ付
長崎奉行大沢豊後守より十四ヶ条之手段之写
此度白帆四艘渡来ニ付右船は魯西亜国王之使者
被指下候旨早速江戸表江被差立候様申来ニ付

名村五八郎 印

差下候

風説書

一 薪水食料之儀ハ入用次第何ヶ度ニ而も可相渡処
疑有之候処食料ニ薪水之直近十分ニ用意之上可罷越候間
差上ヶ申度旨申出

一 魯西亜人申立候ニ付船湊中蘭船繋り場之手ニ碇泊船と
仕候処此段一体之据ニ而も有之候得共許容難成
免も御法度内沖手ニ而繋船ハ中高鉾ニ至迄
有之候中先年阿蘭陀本国船繋場ニ而処一ヶ所
之跡ニ異国船も繋場ニ而湊内ニ而船ニ之儀ハ蘭船

在留之ヘ承知致有之段和蘭人之内絶法ニ而有之候
右之儀ニ付不苦旨和蘭人申上候処

一和蘭人ゟ十二月申立候ニ者去ル午年阿蘭陀国ゟ出生之
魯西亜国ヘ来候者ニ而某候十月ニ至リ不申内右船ヘ乗
組候事ニ而蒸船を見受頻ニ慕候由申候

一白帆注進有之候ニ付右方之掟ニ而合図之石火矢を打候処右忍之合図
致居候共右之趣相渡候処ニ而承り候由ニ而国之掟ニ及候儀を申談
此国法之合図之趣ニ而者何とも候ニ付一九船も有之
決而難相成候由申候漕ニ請申候

一通辞異人江雑話之中ニ而去年十月本国出帆いたし候
処何方之者ニ而有之哉申候処異人之答ニハ昨年ハ此辺相渡致候
命ニ而フレガット并メランスポルトシキップ一艘之船ヘ乗組一同ニ而
去年十月本国出帆并カムシカット地名異船同所ニ而コンヘット
并ストームボードと申船をちりこ役ニ而相渡候船ニ而去ル六月同所
出帆当月十七日之頃十日頃ニ渡来之船ニ而右之船ニ而七人程
ハ大将大将等ニ而和蘭船将漂流仲合有之通船ニ而有之

一通詞申候ニ者食料薪水等之儀ハ申付候得共薪水ハ
彼方ゟ異人之方之漕之来候得共右之者共
其外傍之大釜ニ炊候而持越列漕之者共
其数之者凡百人之中ニ漕之者随ひ候所之流儀

仕掛方等を除し有之を存之様之候所々之
一 四節前之新発明之分巨細之事并此発明ハ所欧羅巴仕
懸と申事ニ而愚若共ハ不存申候
一 南京蘭人共ハ諸国ニ而ハ雑説ニ而ヱゲレス船いよ〳〵渡来ニ付
ニ亜墨利加未渡来為し居候而第ニ蘭人共大船差遣
軍船とも十二艘ジヤガタラニ着船日本ヘ渡海之上ニ而兼
船ハ三日ニ而往来ニ付蘭船ハ日数十日斗ニ而往来ニ而着
なす迄ハ何共無く異船也し事と存居候旨申候
但是等も風説之有之候得共難計候得共御聞之義
も有之小声ニ而他へ漏之義を厭ひ様ニ存居候由申候

一 此節之魯西亜船渡来候由ニ而江戸迄往返之手日数ニも
て及承候蘭人ハ亜細亜ハ此より三千斗掛り候ハ往返之費
もて有之其上此節ハ渡来之黒軍船も二度も日数
ニ懸迷惑之由承り魯西亜人も早く帰船之儀を相
る様相願候得共亜細亜未だ一日本之様子を承り渡中ニ居
候是等ハ兎も角も亜墨利加軍船ニ而江戸の辺迄参り迷ニ候
様之一日往返之度も此節ヱゲレス国ニ而新規工夫のヱレキ
テル仕無く亜墨利加軍船ニ而ハ一日ニ江戸近往返二度も渡
れ候由申候
一 亜細亜云ヱレキテルを当時と申大筒ハ此節ハ相用候様ニ

療治ニ用ゆ処ろ一種也是ニ而工夫をめぐらし壜ニ水
火入力を借りて太郎自然を以て義理ニ而エゲレスにて
此物今比畜ろ致能いたし而以て摘液ニ而エレキテルとや
療治ニ用ひ申候

右エレキテルは療治ニ用ゆる所の器
此療治ニ而治 チウキ キチガイ キヤリ
此外血脈ニ滞る身体不自由なる者ニハ此ハリカ子の先である
所の手を病人ニ握らせ気の通る手を足ニ当て其足の指先
分ニ当身ニ而筋しバリ上りし病人ハ其者綿ニ手を附し及び候

其験ハ其身の血道を動く道理故病ニ一回ニ而
血液を巡き此等ニ而も重病ニハ血道を動しける薬用を
兼ぬ而治といふ事なし右ニ而エレキテルを以て血自然仕
然ニ仕而其申候必ず妙なる療しと筆人申候

細川侯自分手ニ而家来共ゟ申渡シ者守等
統々武藝修業為致候様被申付候異国船渡来ニ付浦
賀表防禦之儀南家之面目ニ而是迄附合候異国船渡来ハ
ニ而も此度迄船取扱等差構候儀ハ専ニ而相勤ニ付
一 松平越前守公火薬等切々 細川家儀ハ毎々抽
相願之通御座候 又同人義等是迄細川家ニ相並候様
候様自分ニ而渡シ大意
南家々々筆者弥々熟知之由
其段申上候ニ付別段之御筋目有之候ニ付今度異国船渡来
之儀ニ付警衛之必要ニ対し然候ニ付見苦しからぬ様精々相勤可申候

干戈勲功之志を含候之忠貞ヲ被表候之事ニ付御
船譜を以て其實用を照し證ニ而者候得共何れも右等成ル事ニ
之候とも我国ニ於ゐてハ面目を失ひ候儀ニ付而ハ自ら欠乏候儀ニ付
度々等ニおゐて此を以て取扱候儀ハ慎ミ候へ不及死罪ニ被行候

此度和蘭人より差出候注文之品

一 蒸気船雛形 二通 一 西洋蒸汽機関実用ニ相成候

一 細附箱 三ツ揃

一 右之外大筒数挺并又細附之義もドントル仕立之方

一 シケイプスホウキユンデ

船製造之法を論し出候絵図等も手ニ入候ハヽ持来候様被
製造之事委細相認候書

一 ノクーレンカルロンナーデ

一 トルペトレ之事を詳ニ記せし書

一 右之通御用ニ付蒸気船持渡候様紅毛人江談置候處右之
何れも手ニ入候ハヽ持来新製之大砲有之候ハヽ持渡候様談
置候

会所調役ゟ書付差出候
蒸気船并軍艦年数渡持渡候様申談置候事

一 附ニ出来候ても七八艘ニ相成候ハヽ年々持渡候様

海路渡来之節其船人数之儀者成丈相省略相済候
様可致事

一 蒸気船　コルヘット壱艘　コルヘット　五艘

蒸気帆船　中小二三艘

右蒸気船并其艘製造方之儀ハ紅毛人も連渡可申哉

丑十月

阿蘭陀甲比丹謹而奉申上候船之御用ニ付而左之
振合を以御渡被成候様奉存候

甲比丹存寄之儀申上候横文字和解

御用船之何船何艘等ニ至可成丈之者備へ而差越候ニ付右
之手続左之通

凡一ヶ条

右船之大サ并備之儀者阿蘭陀政府ニ而御為筋ニ計ひ

二

船之仕装并入用之蒸気并焼炮并備等之用捨
船附属品之儀并焼炮并器具者船之格式ニ応
追而是又阿蘭陀政府ニ而可取定事

三

蒸気船指子式者輪仕立之義者阿蘭陀政府ニ而取極可

四
船之長并表ニ記載し乗組人数之義も唯必用之者のミ
可被渡来事
五
船之来候表ニ何合并積荷を以可被渡来事
六
入港船も高許備之砲入之上ニ而船目録按合事
七
合薬并武器類之義も船之食役所ニ相渡し置候事
不苦事
八
船之入港之後商船目録并帳面ニ而相当之税額之義ニ不苦
右日本式ニ而より合致候事
九
停泊船中士官之事ニ而も船之備之端船ニ而出帆往来不苦事
十
水夫之如きも将官之免許ニ而出角致し夕刻ニハ船ニ帰可申事
十一
士官之者も出角止宿ニ不苦事
十二

士官之者ハ勿論水夫之身元探改ニ教論常細ニ書す

十三

士官並水夫之内日本人ハ致修按之者ハ申出船ハ乗り候之者ハ高賣船ニ並振乃役場帆等

十四

並ハ海賊ニ致シ候者ハ船ニ部ハ附き候而何方之免書並ハ申事

十五

家従之者外都之役士官之者附添日本ニ役所之取立有ハ致度事

十六

士官並船之者市中出之節ハ何業泡日振ハ差免人有ハ致度事

十七

船之用法日本人熟練之上者家従之者何業泡商賣船ニ海航ニ致す事

十八

何業泡之日本之船中諸雑用家組之者日本滞船中海路船中雑費并家従之者之路料之外者船之代金外何業泡政府ニ申出事

十九

船之代金并諸雑費共何年以来何ヶ年限勘定可致候事

二十条

船之将官ニ而達之義ニ付様之儀ニ而無之ニ付何ヶ間敷加比丹共取計ひ

申渡ニ而在之度事

右之通申達候

甲比丹

どんくるきゆるちゆす

夷類頻乞求通商其情狡黠固不可量因茲邊海防虞

雖盡敬言戒　震襟所不綏廣幾以神明冥助不汚

神州不損人民国體安穩天下泰平

宝祚悠久武運延長之御祈一社一同可抽丹誠可

令天氣言上如件

嘉永六癸丑

十一月廿三日

萬宮殿

權右中将勝長奉

進上　廣幡殿

右大將殿

共和列使節應接始末

嘉永六年癸丑年六月三日未中刻蒸気船二艘軍艦
二艘迅速ニ相州浦賀関港へ乗込同所千代崎を乗越
観音崎迄乗入蒸気船二艘ニて軍艦を引来る
事迅速なる事飛か如し請方之陣を無き迄ニ乗越ル事
入津ニ付浦賀表ゟ番船昇平の沸か如し依而応接之為
○浦賀表ゟ中島三郎助合原伊三郎両人ニ而早速乗付蒸気船
へ乗付候処異船乗込ミ候ニ付船を近ニ操廻し候ニ付手続を補
迄目差し候得は相図ゟ異船ヘ乗船を許さす漸ニ掛合通詞
壱人応接方壱人致上船及應接候処北亜米理加合衆国

彼節軍艦ニ乗ニ付商売ハ異船ノ儀国禁之事候にて条々
中ニ処彼云国禁之儀元より知る処之所去浦賀へ再渡致同
無紙面王之命之趣を申立王命なれハ此方も国禁を堺へ
も以申つくし臣下之身ハ王命ハ重き事ハ勿論也 此方云何用ニて渡
来りしや彼答云此度渡来之義ハ我国王より日本王に書簡
を持来りし也 高官之人に逢ひ奉る故ニ無拠不召 此こる免上不申而ハ畏つ
江戸へ参る迄ハ帰国致しと云 此方答る云 此ゟ数刻致し難し
何ニ江戸へ伺ひ命令を待て取扱可申と云 彼云江戸へ催々申日積
る往来とて凡く右返答遅ニ及ひハ彼度本国ゟ数割先ニ
兼る此ニる定義日貴にる辱を揮支に申遅返ニ及ぶ此方
答ニ云加様之事無之故右申上候て伺之趣を達し候間暫しても待ずして
申され此ハ相成候様申渡シ彼云江戸之命令を待候る候間不存
候て了し既に其日以後にて相成候ハ待居申と云 ○滞船中薪水
乏敷候ハ送り可申と申立候ハ彼云万端本国にて手厚用意致し置候へハ
何も不足なし左様之事ハ江戸ハ不及と云 ○船之大小無気力数
組人数ニ此方尋る定例ニ無之事故処彼云其方ニて要ても何
の益なしとて又此方ハ中ても此義之具文高船と遂ひ乞ハ軍艦
なり右様之事申上候由申し出と云 ○棠人者人字抄 又日本語を学ひ
此たる人帰込居（此者ハアメリカ人に上達せし也）此訳人となる此者支致通弁し ○四艘共
バッテイラハ艘ツゝ有 ○五日ニハバッテイラにて所々を漕巡り江戸近く

之御異を宛ヲ川鉄枯場館着候処場ゟ異を見ら上ニ上
陸為さんと致役人之出迎ニ茂押入ニ而是迄之異船とハ大ニ変
り此方ゟ彼之中ニ而ハ一向え合ニ不致着居りし所く地理ニ明
く築之致候所ニ而〇是迄之異船ハ此方ヘ不合以上致発砲
ら処此度ハ左様之義無之暁一発四ツ時一発暮六ツ時一発
ツヽ號砲あり之る船ニハ大砲迄発いたし江戸ゟ見候ハ御内意ニハ
彼ゟ是迄ニ御用ニ無之事有之ハ大事を招く左様ニ而ハ命も角之
穏便之事ニ而相取縦令異人致上陸民家へ立入候共格別之
異ニ而致ヘて手作之且様ニ而ハ書船茂致彼船を見送
林致し而てハ気を配し右之通陸を堅めてあり候得ハ彼内之有

候而ハ右様之上ニも御座候ゟ来ル度浦賀ニ而も兼く用心勝手ニ
相成る様ニ致候ゟ当船を一艘も不残致居候浦賀ゟ品川迄自在
ニ漕ありて四家の国の人数ハ岸上ニ而て続く見物する処ニ〇扨中
ニハバツテイラを船の前後ニ茂致し数之国ゟ火攻等を恐る候乱
〇是迄之異船ニ而義ニ付候得ハ只上ニ而御人数を以而十分ニ相成候ハ
六七分御人数ニ相成候人国條の事中上大事之人国條ハ不申上
候得ハ相成候ハ其文度自然と上下の可然哉も遠ひ居り候歟
ニ而存候
右之者自分浦賀手力合家氏ゟ内々ニ而申来候処之尚又此度
同氏へ内ニ問合せ候而を

○六ツ半時蒸気船一艘中ノ方江戸之方ヘ向テ馳出候処バッ
テイラ四艘ニテ測量シ行ク川越之一手ニテ指留候処鎗を投ケ候
形色出来候ハ斬らんとする仕方をなし馳通り或ハ細引鉄砲を九
を拵へ付方ニ向ケ二三間先キを頬ニ打当つとし通り候川越人数幷ニ
応接ニ而浦賀之同合を以テ今来込ミ異船ニ法煙偽ニ拔ケ就
熟無候也切ニ深メ帰り候浦賀ニ而陸起ニ付候処内ニハ何迄モ
穏便ニ候得共旦又壱艘切ニ深ニ付事海ニ而中ニ而も
諸家中合ニ而原諜息ニ致候都而三組を宛ヶ候得共上ヘ
も上ヘ入候而者穏便ニ而取扱候事ニ而旦諸家妨ニ不堪
手出しを禁し大事を取り居候事ニて致船弐艘漕

出し異船ニ漕口ニ付蘭語国語右ニ致船ハ陸上ニ而見物人を
差押ヘ諸家ニハ諜息をこ申し候船制禁セる処ニて異船を
留押ハ不ニ出す大ニ付異船ヘ小船を以テ只今壱艘江戸
海ニ差込ミ候処ニ付其後ニ而段々申候処異人言云此度指
出候事ニ而候ニ付候得共候ハ其通り直ニ斗ニ而者有内海
測量致し度候処指留候得共候處之内ニハ論ハ有之云右
御座近測量致し七ツ半時ニ相成候処漕戻中ニ而○九ツ時栗浜
ニ而凡ニ候異人ハ中通之上陸ニ相成候處只今壱岸ヘ通シ中通り
処ニ而速ニ蒸気船二艘を引ケ迅速ニ馳来り岸を離れ候十丁
斗ニ而止り 此処深サ廿九尋位 夫ゟバッテイラ弐艘ニ蒸気船右指弐艘御しニ

上陸致し大数有之の見分田を鳴繰込小屋に銀を備へ置き
人数にて固め小屋にも大筒を彦根川越にて人数にて固む何れもゲ
エールにて砲台但ゲヘールを浦賀同心并也早く固め多人数を彦根川越にて
備家を出張りて絶間なく遣者コンミタントと云細工を以て[illegible]持参す
浦賀奉行人数にて固を見て異人芸事を致し或は持参いたし杯して参
く噺等に致し候様子に相見へ上官と役方又異人同様致し候
る事[illegible]前へ寄る所合に上官御役人斗にて上陸之
る処案に相違し多人数上陸を止め不申に付役人斗小屋に押込
上官并奉行に順に立塞り候方何れも作法之彼是制し候其
奉行慮にて[illegible]様子存候[illegible]処出張致する事候

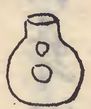
異船并船へ打寄る処掛外軍艦を引き波をけさて内海
へ乗り本牧之前へ相越る大に付為寄せは納米を遣へ相成も不致
却て内海へ乗込候処右合候処異人云候ば返答[illegible]
候は数艘引連大軍艦も乗艘[illegible]浦賀へは船を乗り
に場に至候処測量致し乗込之を其艘は為差合
候條は[illegible]不申[illegible]と云内大師河原之一艘
乗込十日にはバッテイラ二艘にて漕寄せ上陸水を汲んと
役人を押へ水を汲[illegible]細工を構へヒストルを放
[illegible]異人[illegible]〇右帰船中[illegible]合候処測量
来る[illegible]帰[illegible]依る[illegible]内海

ハ滞留ニ而ハ甚不穏危キ角も引戻し候様ニ付浦賀
近引戻し候積りニ合処先ニ十日頃大津辺へ猿島辺
之迄退去候様ニ被仰渡候○十二艘之内蒸気船二艘
ニ而軍艦を繰出し候様ニ相見申候事一般之如く
出帆す沖ニ火焔候ニ付早速又一倍せり居候者驚怖
せざるハなし○彼云本国ゟ急ニハ八日九日ニ而此地ニ着此
度ハ十四日目ニ着候由海上壱万五千里
○通詞申候ハ彼ニ而来年四月ハ此方十月十二月頃ニ当り候ハ冬中ハ
来り申来年二三月頃ニ而ハ参り申候合衆国と云彼申事当ニ成す
候彼地ゟ当所迄由申候ハ来月ニも渡来推斗かたし

且此度ハ数艘ニて来り少しも早く是非何様被下候ニて筆候とも耗斗
廟堂を請取候御為筋ニ而候近キ彼か申条ニ従ひ候半而ハ是迄之
少事ニ而ハ無之候 御国威を大切ニ存候ハヽ請取候ニ付是非近
く候ニ而ハ迎も不容易義ニ而此上御座候一二ヶ所御据付ニ而ハ失費
のことて何ニも成り申江戸内海ハ勿論何と无厳重ニ御備ニ付
度候也大軍艦製造も中々容易ニ合申ヵ候又一二艘位出来候
趣ニ候新ニも申事候又蒸気軍船ニ而ハ積もの之国無候
ニ付文政之始ハ必申来て申候様先日了打ニ候三百目ニて古みの
木を尺寸角を立て五ヶ所ニ而打試候ニ付と安く打割て破ニ大
勢ハ之を而ニ防ニ感心致し候是迄之以く見通ハ随分三ヶ月

以上之箇条ニ而ハ異船を打払ニ不及異船之船號大概を
不言モ可有之趣ニ候中候○舎濃候ハ使者を以て浦賀奉行へ申
出候此度之異船前々とハ事変り兵結方殊暴致し本邦を
軽蔑致し候へ共此上拙者所詮ニ堪ヘ兼ヶ右様之儀者
之儀ニ而至不申候ニ付是非ニ不及迚も堪忍致候間右様之
万一大事を起し候ハゝ　公義之御威光ニ拘り候ニ付此段申入置候
旨申越候ニ付浦賀奉行ニ而ハ畢竟大切之事故差押へ置候ニ付
此段申上候処右様之儀ニ候ハゝ乍去風説ニ付○此十日江戸表へ
注進江戸近海迄も測量致させ候儀不容易事ニ付此度
之儀御沙汰之段ニ而御極有之候ニも可相成ニ付○異船

ニおいてチヤンニて塗り有之候此帆柱ハ異大ニ而ヶ所太キ火の
付安キ物ニ而候ヘ焼付置候得共何等焼討ニ而も随分丈
夫ニ致し居候得共○右合衆国ハ左程大帆柱久米三分
ニ候○蒸気船軍艦其外何れも鉄張りニてハ無之何か鉄色
之物ニて塗り其上ヘチヤンを加へ候物之車輪ハ鉄ニて造り候物之
太サ包之中之寛凡く八五六尺計なるべし○バツテイラ四五艘乃至十艘
位迄大振の方ハ七八十人宛乗組申候小ハ十人位ともニ小大艘位ニ而廿五
寸廻りの鉄炮ありて測量之付ハ長さを西人ニ而も大砲測量ニ而も長く
先之長さ文銭の如くなる鉄ニ細き糸を付丈ニ目をもり海へ投込ニ
測り候くる等有りて深浅を書記す○川浅ニ付猶々深く測へ

上陸之者遠慮ニ制し歩行 ○本牧滞船中筆合筆り
ヲ処英人云四海之内水上之義ハ一体之事故彼之領分ニ無之候と
ニ我国抔ハ他ノ筆ヲ持是非筆談候共陸ノ事ハ未タ是非ヲ
不存故筆談致シ候共権ハ不申と云 ○栗濱上陸之者ハ此方ニ而ヲ
全ク虚飾之実用ニ而無之故彼方へ整吉ニハ為ヨ不申都而嘲笑
招きに者畢竟穏便ヲ主要ニ致しによりて何事も手荒ニ致
間敷之 ○ゲヘール組ニ十人ニ壱人宛指揮之者有り銃を振り下
知し隊伍行列為すも能整ひ実ニ手足を動かすが如し
○差引役冠二色有 ゲヘール冠  上官冠類是 ○衣
服ニカナキン木綿様なる物ニて手ニ纏りやすきのみ子波の袋を着る

○半輪舘之本海英人写一向其頭ヲ持ニ而つる事容
子ハ何ニ人ニ而呈なまてもかけ是とて頭ヲ抑揃子ニ而有る ○上官
将官副支将并人都合四人 ○清之之府何ヲ者ヲ売やへ行に
ニ付色詞を叫く中候之ハ船中へ筆ヲて筆談致云ニ致度候由
る気候ヲ者も無之 ○返簡請之ニハ八月ニ帰国致す事も此
多く往来十當も知れハ本国ヲ者ニ八月ニ合不申ニて来年
来るとと云 彼方の来年ハ此方の十月十一月ニ当る 拙者考ニハ来る事ニ来ルも不知 ○清之本海ニハ四五納
迄ニ出帆ノ定合ニ而処迄ニ校田沖へ筆ヲ込ニ ○為附ハ大きて
英ケ合ニ筆ヲ気ニ入レ水中ニ立くと云 ○琉球ニ一組帰し立と云
蒸気船并艘軍船二艘壱組ト云 ○通詞香山栄左衛門を指

し此人ハ鉄炮を好む人也と云へハ鉄炮の好なるハ亜米利加人
其る事を定る上手にて東と云ふ通詞苦云成程鉄炮ハ甚よ
くも可然へ共日本細様々術ハ又外国ニ及ぶ所に非ずと云異
人笑て日本剣様之術ハ実にあしき所に不足悉く鉄炮にて打まくる
然用立迄も彼ニ及ぶと云り○異船入津之後市中騒キ立
者ありて指図之以て混雑中にも中斗なし幸同中諸之決着
指揮動々及不申万一之事あれハ此者が指揮致し又達する事也御申ある
静り居様にて右遠之一昨房附申遣支度斗致し居候内
ニハ色々雑説流言ありて諸人ニ至る迄動し致方なく嘆
息候○御備之義も先迄ニ姿ニてハ迚も致方なく此度之

異船之義も　将軍様御耳ニハ当年中も程々大事
右様遠く御耳ニ入候ても可有之候事是又大嘆息
○蒸気船車輪ハ糸車の如し中ハからくり仕掛し鉄ニて造
りたる由○異船を破候ハともの事ニ候破る迄も出し不申
ハとものなへハ合薬抔入候へ○弾丸ニ而何ニ壱尺五寸斗之
板を以鉄の鉤を付てその 如き物何程なるにおとりて中
斗の浅瀬にある説もありと申候中ニ右様之物とも見へ不申候弾丸
一同江戸へ送り候○応接方五人之内ニも一両ハ此度ハ高山某と
の事に相成応接致候○樋口多二郎今此書○此度入津之
異船一艘年々渡来致候人を以て中込候由是ハ不出度余程

右地於信牌交易を通し可申と彩し事為る由承り候
後ニハ此処ニ於て秘密之致し居候る一向ニ此方ニ而ニ合紫
角井紙入る度より厳重ニ可申而無之る為不存候由ニ付申立
可致候事ニハ其合候て衛之此等之ニ至り四家へ可達ニ而浦賀
申りハも同節ニ可達し有之候能る処又可申り秘して与力ハ
一切通達無之候相断二ヶ月ニ至り進め時節ニも相成ニ付紀
行為厳令ニ而申断候て申出る処ニ而其用一向無之由断時ニ而
役人ハ異船何様来る日本ニ鉄炮を出し示さハ速ニ退
け返る可申候様合に及へハ識実不堪慨歎。○営人為
る通無之通り上度を存分数数る符合只四月中処六月、

相成候のミ相達 ○六月ニ至る栗濱ニて了解ニ付与力同心一同
詰居候付大抵当御ニ付鼓体能居候処へ俄ニ異船相見へ候と
ニる騒立候し候泊為る相頭処海岸にてモカリ舟ニ呼び寄せ候て
出居候処右洋ニ見候ニ付泊進旅し当右ニて居候由も乞候
栗濱候浦賀へ御践候山鉄ニる当抗了斗之処馳将し小忽能四艘之
船浦賀へ御践し和へ下り長時速相立る之相成し早速
彼船参り処し候処彼申上ハ決ニ付方船へハ候上り候る亡国之時交
事務ニ至る営人候後無通遠事度江戸ニて元来承知之後之旅
ニる彼之是令候不及只入沸之経を達し是経中に付幣
益も江戸ニる可和ニても然共ハ無益只入沸と斗り中立来難ニる

国立公文書館
National Archives of Japan

委敷承知之上ニて迷可申達候處彼云様ハ通詞之者之人ニ而登
可申旨云ニ付通詞前書中ニ而くれ候處左様ニ而彼旨承知致候而通
内意も申合之上ニ而彼旨を書し候而其外ニ而大ニ人之様子ニ
香山へ内意ニて同役不平之を議論有之趣安有之
申候ら処是ハ伸面ニ長文書翰ハ受取上ケ此迄香山へ掛り候ニ有之由 ○異人云書翰杯
候てハ議論ニ及候さ千万ニ而使与申付度存割法ニ而唐を出
無何ハ此方ニ而て彼戦致与云 此方云何を以て彼成致候彼云
云鉄炮ニ而割出之事ニ不当を極ル中ニ而之多候此方ニて能割
して無き不参振て致ス千万ニても無事書林ニ而て
と朝出を持し浦賀奉行役所を出張し千万無を割し又
陸上の見物人を割し実為杯ニ出来候様致置人之能る処異人

異人ニ不ハツテイラニ而自由自在ニ漕廻り候人数不足ニ而山
際杯へ上陸致し又栗浜浜辺も上り候由大地ニ而何方ニ而ハ
○御用筋之儀ニ付栗浜而申候縁々迄御足軽ニ而相定メ四五三百
之小屋上陸ニ而御候仕成下ニ而角ニ而書数十本并板ニ而
囲ひ四方へ幕風を立無し幕二重ニ張り入口ハ孰も杯あり
上官若上陸ニ而迄迎へ道ニ毛氈を敷く ○浦賀奉行人数備
ゲエールル四指挟 合原組与力付添 桶口二人 野戦筒百五十間引挟笠ハ下方根
合備ニ持ち候又中ハ笠張之 ○栗浜上陸之異人 練和網
鈴鉄其員半張云ハ一同幕内へ入込入口前之列を一行
ニ立て上官将官副将小屋へ入与其外ハ二十人程ニ鳴込

ニ上陸いたし候人ハ塞り何れも釼を佩し右腰ニピストウルニ玉を
籠メ有之と云ハ切て放の勢ニて腰ニ挟ハ下ニ居ニ在る右様之砲
ニ備ひ候帆の梶子を誉ぢ見事る其日上帆之中ニ付風ニ上
陸ニ居ニ上り之通を速く相ニ事ニる大ニ評を握か帆中ニ差留る
事様致候事不而一同之気骨髄ニ徹し修造か之を為したる
のニ其ニ中も合　右之通穏便ニ之取計方厳敷成たまし
鉄砲ハ何れも玉を籠す火縄ニ火を付す大ニ異人ニ威を示
さる近きくも亡き申か為事に右本山並成る事篤実
之事方ニ渡し事済ニ談して事ニ相係お附込篤と致ハ当日
三合ら居候営人を取く中通ニ而乍申に事処彼云営人ニ与

事皆明白ニ候ハ其是赤船も不残大船ニ而来事ニ与ハ指支
ふる事速ニ返答有之取成為中ニ付此方云如様之義ハ急ニ申来す
ニる評定も日数かかり中ニ決急ニハ為申来ニ与之ハ彼是無れ
ハ諸居申与云此方云此所ハ江戸の之乃裁判ニ而申達
天子ハ奏聞致し重評議ニ及ひ申候舟余程日数も掛り候
事ニ候ニ付ニ取上ハ一先致出帆致申候ニ処　右ニ而先出帆
致し二ヶ月も之みゝて是ニ来船其有ニ合申ニ付来年ニて致と云
翌船も中途ニ待屋由　○異人云此度ニ上官ハ国王ニ命を不
請何事も相談ニ而致裁判之相の重役也と云　又異船の総
将軍ハ今之一度軍功を不立ハ帰国無之船の大将ハ不成由　○

異船之義ハ乗出候由下の方は深く右ハ中鉄板小実
ニ張り水入ハ銅ニて包海深サ相成近ハ通船之由　○川越ハ実
律ニ浦賀之粗勘定奉行様ニも人数相成候多分上乗キ
方之太守ハ知之候ニ付家老持度ニ而当職ニ付石高ニ候　○
細川家本牧ハ固ニ而浦賀ニ而ハ与力共ニ而山脇様ニハ虎蔵殿
也ト水戸老侯厳重ニ而国々方備いたし居候様子ニ見え申候評判
宜キ方　○四家人数内会津様ニ而評判宜敷文用ニ而井伊家
ハ甚武ニ而惰り士共も弱く候様此度異船救護製作有
之処浦賀ニ而船大工ニ申付候ニ付いたし候得共船ニ而其ヨより腕ニ而様ニ申
候得も何れも大工仕合ニ而大工ニ申付候得共ニ而致し候不致候ニ付

得とも何れも識之大金ニ而費し候ニ付異来之人を用ひさる様ニ御座候
由ニ候之右様ニ而船何程有之候而も心用ニ立ち申さず中々易き事ニ而人も
無く武事ハ人を不用ニ付上文ハ相成候十五万石而も柳原様ハ与
御用ニ付却而宜しかるへくと存候
○風説ニ此度土ニ而脇来ニ而長崎ニ清ニ而合戦最中ニ而英人
脇ニ而支ニ而大ニ戦ひ候由何れ居留剣加之瑞ニ自由ニ入込むとさる説
○香山栄左衛門事少ク出奔之記
○六月ニ而渡来之異船ニ渡フレカツトニ渡北亜米利加合衆
政治会府西之内ワシントン名都カリホルニヤより船ニ仕立出帆ニ而国
王ニ申年舎ニ乗組人数カリホルニヤ出帆より十四日目ニ而此上着いたし

○彼方之者軍兵五十余人許也名ハマツテヒリ 日本ノ左大臣位ニテ高官ノ由 上官
是軍大将 軍兵五十位名ハブカナン ○大蒸気船長サ六十五六間
幅八九間車指渡し五間斗厚サ三間斗総鉄ニ而木を用ひす
船ハ鉄張ニ而板張之ハたとて塗り水入ハ綱にて包む手有
入四尺斗水上三間斗大砲十門小車輪仕掛之六十八ホント
ノカノン筒六挺八十四ホントノホンヘンカノン四挺〆テ十挺之外
組込る九拾人有役名ハ上官副将皆此ニ居る十二ホントノ野
戦筒ニ輪車掛六挺船ニ載 ○小蒸気船総鉄張り大砲六
挺野戦筒六挺乗組三百人○フレカット軍艦長サ三十間之
大砲六十挺人数三百人程野戦筒六挺ツヽ○船中昼夜

之而く挽焼を射 ヒイトロ形之有 鉄炮ハ玉を込ル蒸気船総る半
なし総る用心厳敷致し〆情る事無之船中静ニ候由
之く指揮を○蒸気船を留るにハ別ニ定ありて蓋をあ
け水を蒸気の不出様ニ沸て車を廻し候蓋を取れハ蒸気車ニ
当りて旋り候事蒸気船一昼夜ニ八百里斗走る大輪車ニ而
云物ある由是ハ一日ニ千里陸上を走ると云 ○九日粟浜
ニ而書翰を受取る故彼より上陸之人数三百人斗上陸致して
本船ニ而大砲十発発あり是ハ空砲之由一同陣列を立し喜楽
を奏し国王之書翰を中ニ挟之ある国すゲヘール但二百五十四人一隊
四十八人充六隊あり一隊ニ二人充指揮人あり何も刀を抜指揮す

法則能整ひ居る由口舌ニ述話し前代未聞之事之○
国王書翰銀紙ニ而作ル也板三重ニて封し候ニ而高サ下から高サ
六寸横五寸長サ壱尺銀三寸外板ハタガヤサン金の縁金ニ而封印
ニ而上ニ金ニ而口寸位ニ○此書翰を去る六月ニ至るニ而飾有之
立派成事也并書翰ニ添一同ニて文政元年寅之事出帆有
紙包ニ而封印あり使節上官副使四人ニ而上陸する曲録を
謁く其時ハ席ルニ総督を封面一切ニ而対面する品々を
備へのこと之兵庫イボレットを付たる者十五人と共く押込上陸
ニ而着ヘ上り使節を屋口ニ立寄り何れも六挺仕立之端舟を指細
を常用イボレットヲ付ル者ハ余程宜者ノ由ボイストレ慶来ノ節大将分二人外イボレット付ル者なし　イボレットハ金ニ而板金ニ而房を下ケ

飾りにある肩へ付る也○ゲヘールは組何れも人品宜しく壮年の者也
立派ニ付、赤黒ニ而玉を付あり車あり大統ハ銅ニ而ホタル等之車
ニ而布を付鉄砲ありハ鉄砲を付船ありハ砲を付る
○琉球に七艘此度来着此方出帆ニ而琉球へ寄り支那広東へ
行商船唐人通例より仍来ニ云ニ加勢致し潜瀬と見合有
故ニ漢人ハ軍見前ニ被国致すと云
○亜美理駕州先年ハ英国ニ制せられ漢人ニ催促ニ而出
陣を致し大きに敗せられ処又合と成打勝和平無儀以
来対々ニ国と為る是ハ七十六ヶ年前の事之由
○自司ノ権共和政治七十六ヶ年と書○ヶ年號ヤソロセチ八百

五十三ノ年ノ由 ○士大将以上も上官之者指揮を乞も細
之様く指揮す 細長サ弐尺三四寸 長サ八三尺余も有之 ○
此度も異人英国ニ比すれハ温順なる方之総白法則ニ整居
りすれ共 是迄ニ不異先者ニハ至く数年立す危ニ成りけ
し云者中 応接之段疑惑ニ処ニ 異先ニ候ハ大ニ為替様子ニ
る指図無扱能者無之 此方少箇ハかかる手荒きる有り万一事起
きれてハ大変ニる有 何ぞとも たやすし 此穏便ニ無之扱
船し承り所 又来船ニ様子此様ハめ有る成ば何も無之るにお
遠ぐるは 異人ニ接仕せん角ニ指さるちんとゲヘール総も船ニ
接之有 ○此度彼之船ハ大ハ云迄ニハ如何す者様ニ之彼ニ

船ニ而有之ニ付返翰之義ハ ○近岸泊ニ申出○
出らする下田沖へ異船帆影見之ニ付下田ニ而附船之ニ付候
船ニ来ル異船浦賀へ為知ニ付し而之下田沖ニ浦賀へ迄来附
之承り候処来る海上三十六里
○着船之上ニ而依之令君相越中候之所近岸泊（三人計 応接方）承り度ニ決
ル上船之不許国王之書翰被持来者之方ニ事受取候之事
無之候 又此方ニ而手渡し可申候 半ばニ致し候 半ば之所々承合
無之候之定例ニ而此地ニ而不受 支国（様子之）長崎へ可参
之由申諭ニ候処 彼云此度之儀 先年蘭人（之を以）可申遣委細之ニ而之船
之事ニ而右様ニ者半ばニ而ハ如何と云て大ニ服之之掛合向之

疑敷候　○此度之異船英人も通詞有之候処此年若
年ニ而日本ニ相越候ニ付失も只来寛之来り候も不知候ニ付甚
無力も一向無之居不申候掛合候而ハ大ニ困り申候由　○此節
異人之渡来致候ニ付国王之致復命候ハ承知無之と云ふ事ニ而必死之
様子ニ而三度も彼是掛合候処中々六ケ敷依而再度江戸へ申上
○七日ニ江戸ゟ請取穏便ニ取計候様被仰渡候ニ付則日
浦賀船ニ而異船へ参り候処彼之方ニ而返事ハ無之由無拠候得共此方ニ而云
失ハ急ニ出来不申事ニ付中ニ而処彼之方ニ而ハ国王之御返翰ヲ
之下書有之此度ハ此下半年之内ニ而返事致し上申書
引替ニ而致し候と云右様之手段を設候得ハ其外此度ハ出帆の上

異国返翰ハ追而之事ニ致し候様彼約定取決め候由ニ而異人承知振合
ニ致し候　○旅籠屋ニ而之出帆之儀彼奉行ニ而面会ニ付副
将ニ致出席候　○此度返翰之事ニ付而ハ日本王之出帆之
守護致し候半ニ而人数ニ而ハ日本之紋有之候旗を立候軍船
数艘仕立尚又大軍艦ニ艘相引連此度ハ我国王之手
輪を立候人数ニ候　○フレガット軍船ニ大砲二十四門
蒸気船ニ大砲ハ挺位各野戦砲も数挺有之乗候上陸ニ付
往来も送迎致し蒸気船へ上り船中致し一尺之処ニ而大
相違之廣大ニ而一日ニハ尺程之水を蒸気船車輪等之
仕掛之又廣大なる事ニ而不申候　○出帆之儀も彼之渡

異人帆柱ニ取付居候ニ付、船ニ添ヒ附寄候処、直ニ帆を
出シ候中、船中ニ整ヘ一艘ヲ返リ候得共、静ニ右を動シて帆を巻
○去ル箱館ニ居候節、何分之安事ニ候処、大ニ被召候処、何事も
無之被為入候

讀此録而不慷慨痛哭者其人必非志士讀此録而
不皆裂髪竪者其人必非壮士讀此録而不忍以
身殉家国天下者其人必非烈士吾安得志士
壮士烈士而共泄胸中之不平哉

平太星跋

俄羅斯書翰

和解

大君皇帝首仁　幸来俄羅斯統轄主宰之上宰相子也
利羅德　遞至
大日本国貴御老中
大君皇帝俄羅斯統轄之主宰遠視
貴国當日物情日思両大国疆域相錯之重事遂
起善意乃選御前大臣俄羅斯水師將軍布恬廷
永平奉施全權遣使前往大
貴国志之一者乃詳細誠列當日一世之衆変
貴国之情形如何為以至露懐
貴国命運所感之心是也再者乃題起両件事以

使両国属人皆得進其益以断決両国来日相磨
相疑之處即以至于相和平安之誠矣也首件事
大皇帝所愿行者乃分明邉界之地此事既知當日物
情及視圖注両国衆海有何無所籌之圖使不可
再日久推延之是以
大皇帝以為緊要今即起事相會商議方定決
貴国所属之海島亦何為南方末尾之界矣以外愿
両相説明カラフトノ南岸如何也
大皇帝既主我邏斯自古以来未有之国大廣如此自然無
需要得何新地然而不堪失属人之真利因霊明思

之明定両国疆界者乃為相和平安之本也第二件
事
大皇帝誠所願行者乃准本国属人無碍来至
貴国海口相換貨物交易臨時本国呂舡渡海往か
んさぬか及北あめりか地者有緊急事須到貴国海
口以備所需亦無禁依其意之也無疑
貴国真利也本国於
貴国以交界之故彼此相交自然之理義有大而越
過他各遠国之理亦可明之矣此皆誤御前大臣水師
将軍布恰廷所奉命詳細傳明之貴御見中遂越明

可見本国意愿者絶無所不符按與正理矣此事皆
該將軍所欽奉全權尊照細訓勅令會
貴国大憲相與議論而後尊照上命立定約會章
程矣總而言之遣使朝
大日本国
大主之定向者一則乃開發本国意想天下當日物情奈
何二則乃鮮明分疆界緊要之事三則乃開路両国
属人互相有益有実之交以致両大国於至善至寧之地
位也無疑將欽差有大重事御前大臣水師將軍布恬
廷

貴国必待厚照禮秩與其高位矣亦無疑
貴国
大主之智賢宰相諸老皆留心察本国所題之皆事及該
欽差大臣所命證列之解語即行勉力妥倫互相有
益事之始終矣
書在御都さんぺてりふりげ八月二十三日一千八百
五十二年
大君皇帝俄羅斯統轄主宰即位以後二十七年
本文下書
國宰相國公子也利羅德

大君皇帝肩仁幸來俄羅斯国　統主宰の上宰相
なる子也利羅德書翰を以　大日本国政府帝宰相
大君皇帝俄羅斯一統の主宰ニ於て遠く　貴国南附の事
情を察し給ひて　自ら南大国境界の事新タにハ大事を
思ひ伺ひて南国の為ニ御配慮を可致ニ依而家大臣俄
羅斯水師將軍布恬廷永年之中より是を選み全
権の事を託し以使節として　貴国へ差遣しぬ
抑も此事ニハ南附世界の為ニ交友結約いたし　貴国
の事情形勢ハ為に存る所の既ニ条約ニ申出　皇帝の
命を至の感意を不得止ニ命成り以て然る本

言をあらたにし述ふ也　其二ヶ条ハ後の両条ハ事毎ニ中ニ立
両国住民ニ人民普利益ニ進み両国此相争論絶心の
要旨を決去して永世ニ和睦平安の真実ニ至らしめん
となり第一条 大皇帝頻りに両国境界を
地を分明に改めんとなり此儀ハ既ニ両国の事情を知り
兼て両国を遠る嶋中ニ地何連ニ属するを確定せさる所あ
らんや依るハ此度此條ニ於て定りし之までありし右様ニ
大皇帝肝要の事とし格別殿(?)此事を足下ニ委任し全
合評議して貴国領の嶋ハ何連より北方極末の界
と決し吾国領の嶋ハ何連の所を南方極末の界と
決し又北からふと嶋の南岸ハ何連の所迄と取扱て上
分明ニ之極め候ニ 大皇帝ニハ既ニ俄羅斯の主と
なりて古来未曾有の国土広大なる故ニ今ハ自然と何連の
新地を求むる様意ハ無之只々人民のよろしき便利を
之を求め且以終る明細勘考致し両国の境界を
定めるハ和睦平安之本となる故第二ヶ条の事
大皇帝ニ又望む所ハ本国の人民貴国の港ニ至
り貨物を以て換へ交易致し候様願付且又懸付ニ至
国ニ船舶を渡りかんさぬる為ニ不足なりし時の地ハ欠ケたる所
要の事ありて　貴国の港へ入りて入用之品を求調候

あるへし是も其意を保ち以来永く親しみ交く候て猶
貴国并ニ此邦ゟ双方ゟ出し候使節の此利益を助け候
ハヽ其外ニ附属の者ニあらさる其上本国貴国之隣境の
事なれハ相互ニ親交せるハ自然の理義ニて甚た大なる
事国より他の遠国ニ交るとハ格別ニ相協ふ事ハ疑なく候ニ付
以前ニ申述候此事皆ニ御家大臣并師将軍布哇廷なる者
君命を受け委細陳述すへし之 此度本官も命を以勤る者
ニ本国の我儀ハ正理ニ符合せさる事なく其趣を以て為る者
ニ殿下与存念此故ハ其大の将軍其権の命を請け畢了主
君の訓戒勅令ニ符合せ 貴国の大臣与会合して

共ニ評議して主命ニ而合せ約束法度を取極め度候ニ
大君を兼撮ニ申上候今般使節を 大日本国の 大君
殿下ニ信任ニハ其一ニハ本国ゟ親交を相求ニ然る一体之世
界両附の形状事情の為と云而其中之其二ニハ両国境
界を定め以定ニ行政の事を申之其三ニハ両国相互の人民手
ニ利益あるの交易を相始め両大国を交極め合の協ニ諸る様
成らん候ニ而事ハ親しみ求く為め且此度甚大切の用向を取
計ひ御家大臣并師将軍布哇廷も 貴国之委任ニ宜敷
候る両人身分并両国の礼儀を以て高位与全権委任ニ被下候
もの親しみ候与存候 貴国 大君君の賢明智略ある

執政老儀方告知らせ候一本国中ニ而議し事此儀を
大臣へ申付談判陳述及び此書翰訳文の儀を老中より達し
述らるへく候書翰を以て南京表ニ而利益ありて候様取結
安全ニ成行候様相願候
此書翰を御部さんぺてるぶるくニ於て紀元一千
八百五十二年　大君主帝俄羅斯統御主宰府佐
以後二十七年なり

本文下書　國宰相國公子也利羅德

印

大俄羅斯国御前大臣欽奉全權使東海水師將軍
布恬廷
照會事謹傳本国首宰相国公子也利羅德所書
之俄羅斯文加阿蘭佗之語處至
大日本国
貴御老中以貴通明本大臣遂照副本加唐語以處
之自此国公子也利羅德之文
貴御老中必可見本大臣來此者大重事以内緊急
之良分明両国疆界之事也此事也者必宜
貴御老中會下本大臣両相議論之盖

貴国必不堪使本大臣一人去擅定両国之疆界矣議
論此大重事之人遂時必宜處揩至
貴御老中遂因以即得依議之勅必宜居在
御老中所在之處江戸可辨十日以内之事長崎必需
數月之久矣是以懇乞
貴御老中無遅使本大臣帶緊要之人至江戸無遅
起事以論之往江戸如何本大臣遂尊照
貴御老中之意若海路之本大臣遂有船四艘若
貴御老中不依之本大臣遂候准走旱陸因尊聽
信為此照會順候

近祉須至照會者

右　照

大日本国御老中

一千八百五十三年九月九日

癸　丑　年　八月十九日

本文下書　御前大臣布恬廷

（印）

大俄羅斯国の都なる大臣ハ全権を欽奉し東海ニ
使する水師の将官名を布恬廷と云者及ひ掛合之次
第也物ての中迷ひ我本国并ニ唐の宰相ニ呈ス云
なる名を写也利羅徒と云者乃出せし俄羅斯文以て
吏ニ河蘭陀訳の文を添しめハ大日本国の公儀中
方へ御渡し致之の分明なる事かたく有之候より其上使
太の副本ニ各へ又合唐国語の書を差添て御渡し
申候かく書翰ハ智様ニも矣法国ニ在る写也別羅徒
の文出之其を見んかため公儀中方ニも掛ニ其を相載せ
し其大なる分条の内ニても急務ニして六ケ条ニ而其

邊疆を明白ニ相紀ス事なる八ヶ条の書ニして 西ニ於て
条ニ於ては公儀中方掛りハ宰相と東下双方より論
判て双方の事也元来ニ国ニて掛りニ人ニて相論ニ西
国の邊疆を立極ニ申ハ仮ニ而永ク不ニ相ニ候得と大
ニ事件を論判する者を公儀ニ面を立之 御老中
方まて差出直ニ而評定此勅書を以て 御老中方
諸奉行ニ而掛合之来り候事也其旅宿江戸ニ而十日の
内ニ行付ニ相の事も長崎の其地ニて為す数日の久
しく事故にも此使ニ候ニ公儀中へ係く在外ハ速
帰なく公儀中ニ掛り之用役の者を長崎江戸表に

又於近江之世段右一条之元来之論判御年之頃ニ於
二千之後相江戸ニ談之候ハ、両国之境御尋申候方の界
ニ相成候箇所路を相殿候上ハ、相互ニ報ハ被ハ相
定置候ハ箇所之壱中方箇条ニ御免ならハ、相定陸路
の所ハ是其免あれとも北之島ハ、箇川の所是大
切之儀ニ候ニ付箇件を皆被受合ハ近ク此の所定め
申可候以上ニ候ニ付差をて受合之下及候之上
右之臣大日本国御老中方ニ受合申候
一千八百五十三年九月九日当ル癸丑年八月十
九日

本文下書　御家大臣布悟建

印

報俄羅斯書
伏接来札知
貴国御前大臣布恬廷所御舟航来親臨遐而其
書実係 上宰相子也利羅徳公見贈焉閲書
中所陳述云 貴国
大
君主思我両国邊疆之交錯欲加釐正備悉意
旨又云 貴国既據古来有廣大之邦土無要
別得新地持盈保滿之道良宜尓且我邦与
貴国各土其土民其民無事相安原靡開衅之
端乃假使節之挙其出好意而不出惡意亦為

彰明較著不容疑者 貴国既以好意来我邦
何得不以好意相報耶第邊土之經界 貴国以為
甚不明晰則諭飭之蕃加査覈而差大吏与
貴国官人會同商議以帰劃一然邊土之査覈必
按国籍確有憑拠慎重従事不許絲毫疏謬是固
非今日所能辨也若夫貿易来往之事則宗祖遺
法有厲禁歴世所遵奉不失故曩昔 貴国嘗有開
市之請而我邦已業固辞意其顛末 公等所克悉
也但現今宇内之形勢変遷貿易之風駸々日長誠不
能取古例律今事項者合衆国人亦来乞市日後

別国之互市者必接踵而至夫列国互市之繁如此乃是我尽一国之力応兼星羅碁布之万国其力之給不給未可知也且如我境内邦土之貢換其多寡猜狙豈旦夕可辨之耶矧我
君主新嗣位百度維新如斯等重大事項必奏之
京師諭告之列侯群官恊同商議定而後従事顧勢不獲不費三五年之時月雖差似延緩　公等且従吾言坦懐以俟焉迨議論一定諸事整頓之後便当登時報聞也況我国之於　貴国壌界相接宜加鄭重故特遣重臣二員於長崎會晤布悃忱以尽其曲折而其他所宜布報者亦皆俾之面悉幸有以諒之不
宣

大俄羅斯正宰相子也利羅德閤下

大日本国老中

阿部伊勢守正弘
牧野備前守忠雅
松平和泉守乗全
松平伊賀守忠優
久世大和守廣周
内藤紀伊守信親

嘉永六年癸丑十月十五日

嘉永六癸丑年七月十八日肥前長崎港へ魯西亜船
渡来ニ付書翰之写

一 大将船長三十六間幅拾七間釣大石火矢三段ニ積へ
釣揚六挺元太夫并釣挺艀ニ小挺波蒸上より波歩
道作り船の小船与西国へ装へ何先押入数多備置
是ヲ除与案以

一 副将船長廿弐間八間四天石火矢釣段ニ積へ大太
夫釣揚六挺艀ニ釣挺何連も家日取

一 三番船長釣揚十八間大太夫積云釣揚挺是黒船ハ
白云様船也

一 小番船長拾五六間斗是も火船也何連も三本
帆ニ上ても此船釣本樫ニして帆秋錦の頭のめり也

一 本船中ニ五尺斗廻りニ而長ハ百丈火箱也上より八五尺
下りて横ニ掘り如し穴あり右へ附火を焚キ出る時ハ
火を消しも早く車矢よりも急也

一 人体衣裳ハ紅毛人のやうニ而も皆大きくして五尺より
六尺余或ハ七尺位の人也右之人中ニ紅毛人と八かし遠ひ
鼻格別ふ高く面体ハ凡日本ニ似たる髪を短く髪之
上皮ヲ省形の頭巾を冠り下皮ハ大黒頭巾ニ似たるを冠

り壱番外本船え人数差遣候人員番三番ニ番太
ニ番ハ未タ江入来候ニ付先方へ申候ニ付ハ兵器取上ケ人を佐之申候而沢
可致旨相達し候ニ付保兵衛込候ニ付日本船之ハ差留り
船中へ人数多く候得共枝子の上ニハ出張り候一同中之内ニ而
入候処右尚又其余船へハ尚又無之候ニ付一同之者迄ニ
乗込候義不相成候

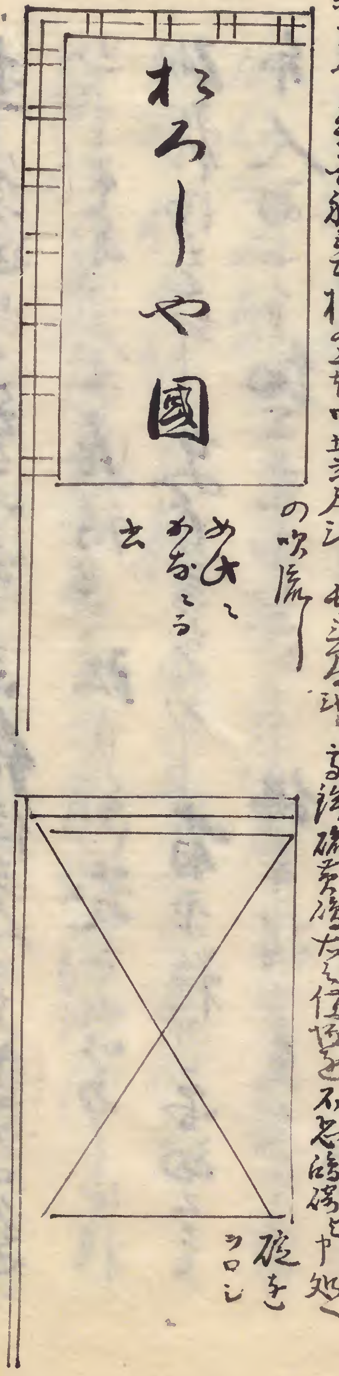
一 大村地役人ニ先手組頭石役を以来り湊内之沖中へ
相成候ニ付様子相尋候処ハ小船ニ而乗附書翰差出候ニ付ヲロ
シヤ船の者見届候得共右之旨申通シ候処石火矢を
仕置中ニ漂流船ニ而不申ニ付召捕船ニ乗込候ニ

早速ニ日本船ニ而追込ニ及ひ候

一 御奉行所ゟ検使として御家来作近先手附高橋
其左衛門福井金平与力ニ而御家来ニ而高林忠之
進又与力ニ而異国船石原の検使として
大平加ニ而御役所の幕を張り船印を押立数多
引船ニ而日本の武威を輝し長崎ゟ三里斗
り沖神崎与申処ニ而船を居へ十五日船手を打石
火九艘の諸家様御役方共相役揃ニ而御備場御
手当松平筑前守様松平肥前守様九州ニ而自身松
平主殿頭様大村信濃守様五島様

有馬様小笠原様大村様五島様御預ケ
様語合ニ而番所之方各ニ陣場へ罷出番船を押立二
ノ備へ之内松簡り火矢を焚キ侍より硫黄島迄立並
申候右白表之如く海上ニ請象の立船并其の数不
船印を立三ノ備之高張灯ニ而海上を照し寸地ニ消
地無之誠ニ以篝を焚し中ニ番所ニ離而松草
紀前高様御船之内沖ニ而船之上硫黄島迄中処へ
新番所を構へ只今迄有来之番所ニハ陣張り都
指高中茂番所を相め御繁栄しニ番所之都十八艘之凡
高月の大方を立取候し都十四艘月合船五六艘ニ相見え

三十五挺も立てし船ニ目を離ス様ニ備場之左右小繋
ニ高張灯前後船の画図ニ不抱ニ持場也
一前条中之異国船之柱の上ニ中五六尺計り長ニ尺計の吹流し



船表先ニ大筒ニ船印を押立小繋ニ
高張硫黄侍左之備場を不忘候様ニ中処へ旗を立

右船入津之様候ニ而高所野為人数手当も
手厚く警衛を厳重ニ致し前々本船より小船ニ乗り異船へ
船を附通詞并役々中入ニ而諸事承り候

撿使并蛮人船ゟ御役人衆中へ以酒を呉船ゟ通詞ゟ
へ申出為船之儀ニ而船中ニ而一同菓子を出時
以拾之後年頭気ゟ下上之候扨ニ而処不苦与
来ニ寄込候而至る所嬉敷候由使節人へ是キヨクロクを
出し其外悦候事通詞より聞ク茶之の而以て様
砂糖湯を出し其外菓子を出し有手煎茶湯之盃
外人々壱ツ宛菓子を出し佛手柑并天文冬菓
かん葡萄杯の砂糖漬を出し皆々食候処蘭書
酒ブドウ酒抔の名酒を出し其事ニ而壱人へモツキニを千七
人ツヽ且絵并笛抔古鞁箱羅を以皆々楽

之仕たる事を致し除ゟ渡海いたし日本船へ引受中ニ
一 十九日ニハ撿使福井金平殿林太兵衛殿衆込
候而義取次れる下ニ参り候処右之通詞を
以何様成船有之ル日本へ渡海致しハ何等之訳ハ
日本ハ仁義礼智国を以名字通承致し候
親族の交改為帝王ゟ蒙仰渡海致し候由
中ニ而茶酒請御出請上下上ル由中ニ而船将不出合
中官人ゟ壱人浪人手形ゟ通り候由ニ而
此日ニハ砲術杯を致し其和蘭鉄炮を持歩き中ニ而入参
右様之事其総将たる者之節ニ而其舟之事化為

也、右船の様子引将ニ長サ五六尺も有之不分候
中ニ飛込右ニ将下幸長サ尺之但シ者ニ字ナ動キ斗
差動キ人申述天気ニ而以板ヲ沸上ケ揚込候得共
失候故差置或ハ板をかけ或ハ飛移り向テ横ニ履候
ハ右の板ヲ以上ヘ飛上候處其動き候人斗飛込候之而壹ヲ
尽シ候附ニ而船内の熱ニ不知ナラズ候諸人大弥の水練尽申
候得しかる義代未定也ハツテイラ船ニ乗り入救人ニ而飛込水
分動キ人斗ニ而漸く上ケ候船内ニ居候者共水中ニ而下る
仕置之段申付之

一 異国船之義ニ付差支候由之義何分宜敷様ニ致し度候段頼
以後国法ニ依候而以前又々御礼筋ニ差支候歟
其付銀鋳遣候処以上次第ニ而前筋ハ不論次第ニ候
異国ハ積来りハ何分送り候者積之船計諸事
勿論ニ准し候得共以後ハ此方へ入津之会自ニ而船ニ入
国王之命を受渡来候得者是ニ而得自身之抜け候
不定義ニ而其者共船ヲ止め候処右之帆樹等之
引取候者船等又其破船之諸浦ニ而皆々取之細ニ入仕
候者救護本船出帆之上漸ク七月廿日異船
右日迄之御諭ヘ出帆同月廿日ニ帆船之十日
之限度も之出帆

一 前條之事甚有之よし申上候

一 七月廿七日木村丹後守殿御屋敷ニ而殿様之上ニ大キサ廿斗の四ツ足ケ任の色成何方ゟ来り而殿並ニ御屋敷御根の上を踏歩行尾瓊破り殿様も驚給ひ若様ニ而大男の姿夜市中へ下向共飛下給追も妖怪斯延を給人皆驚を請し行候へ追かけし元は平人気も無之人有之二ノ侍ニ而日人様ゟ困め切も侍ヲ離追大津ゟ中处ニ陈而有之ニ而大家の気様ニ而除て調ニ而侍ら殺ス処白夜因刹大ニ妖怪何方ゟ有ニ而侍ニ而市へ飛込ミ処一同驚ハ恐し候ニ而夢ニ而用意之事ニ夜鉄炮ニ而打留んと以たし候処何方江も逃去りし事也然らしる黒田様中小笠原様ニ而早船ニ而急合之人騒動し候ニ大風起りして大坂を打上ケ船岩其人ともなり船破人の柱ねれ共く丈化之の出よりと主ハ家来を化之のとかん家来をも化之のとかん事ニ継合一附斗りも有る附ハ只今変のかんたるたく事ニ恐を見合あ不申果たる事也ぜ彩ある事一夜にて

一 五六夜位

一 廿五六日頃細川薩摩守殿屋之宝船不斯騒動いたし候船ハ船中ニ夕ツりくと嶋吾して丈より前文之通り自分も皆生命を積り為迄とも人々皆化之の、

めぐる迄ハ静ニ騒ず市中へ出ず皆々忌慎候ひし人
丸夜ニ往来なく漁舟ニ至ル迄商人舟杯ニ至ル迄一切出
帆さ不事ハなし
一 廿七日夜ハ国造以着座方角ニ向ひ同国境ニ向ひ海ニ至
市中へ着座之処御殿を始めとして出雲国下着之
縁ニ而有之候処其丈夫数十丈の大蛇を顕し出し騒ぎ立夜
ニ而其数多人数鉄砲を携へ通ハ竜と唱へ申候
又可然ニ而夜ニ着座ニ而其をまでは出るとは着して中ニ
上り幅壱丈程之中ニ焚き候ハ家々又ハ其日立ち
拾合設之事一夜ニ三四度往来なきとも皆家の

一 浜場ニ揚る丸様々枕之の青蛇以泊
是迄御役所ニ而手船ニ而何の見事も無之処大社献
可申附候條是ハ明和年中ヨリ相成人々其妖怪ニ
龍蛇之由ニ而重ニ紙ニ包ミ拾合大社ニ献納いたし候太社ニ付人々
龍蛇の説を以て蝙蝠ニ葉ともまたハカハラツノ葉とも
云家ハ此浦の浜場ニて朔日の比ニてトビ魚なり
トビの化して海場ニなり三指ノ草ニ斗り寄ニ彼浜場
ニ無之事あり此業ニ而も云拾人の内ニ人ハ直ハシロ
シヤ邪法ニ而りすと云甚くハ此等ニするつもし
御役所ニ而差出候迄ニ而朱市地ニ而ゐる大社境

日本政府圖書

大明神江悪魔降伏之祈祷日夜有之候様被成度
旨、右ニも太子様有之兄右様格外被成候ニ付尽率ニ願
奉申候以上

丑八月五日

長崎出島町
大庄屋方内
川村広吉

前田丹後守様御内
秋葉蒼之進

右様御次役
川村修右衛門

備前吉蔵方
廣瀬屋定七

松平三河守様御内
横沢忠三郎

日向宮町二丁目
薩摩屋宗兵衛

日本橋戸町
吉田孝三郎

国立公文書館
National Archives of Japan